

# ステータスシンボル、庭園が教えてくれる 朝倉氏の風情

**中** 世の庭園には格式があり、その空間は一定のルールに従ってつくられていたことが洛中洛外

図（京都の景観や風俗を描いた屏風絵）の描写から推定されています。洛中洛外図に隣合わせに描かれている細川管領邸と典厩邸。それぞれの庭を見ると、庭園の格式の差



秋の諏訪館跡庭園

撮影：北野武男氏、

画像提供：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館



冬の朝倉館跡庭園

撮影：北野武男氏、

画像提供：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

が見てとれます。当時、将軍の補佐をしていた管領は細川家の本家、典厩は分家という関係にありました。管領邸の庭園には水を湛えた池が描かれている一方、典厩邸の庭園は白砂敷の平庭となっており、将軍邸には池が描かれていることから、池庭が上位の庭園と考

えられていたと指定されています。

このような庭園の格式の差は、一乗谷においても同様に見られ、朝倉氏当主に関係する館・寺院のみが池庭を配することができ、それ以外の屋敷は全て平庭となっています。朝倉氏のナンバー2と目され、5代朝倉義景の従兄弟である朝倉景鏡の館でさえも、平庭を配しています。また、これまでの発掘調査により、50軒以上の町屋が確認されていますが、庭園は1か所も見つかっていません。これらのことから、戦国期において庭園を配することは、ステータスシンボルとしての一面があったといえるでしょう。

朝倉氏が育んだ「朝倉文化」の集大成として、永禄11（1568）年の将軍足利義昭の御成に合わせて造られたのが、当主館（朝倉館）に配された4か所の庭園と建築群です。山裾を背景に池庭を配置し、池庭に張り出すように小座敷（茶の湯座敷）と泉殿（遊芸の場）を建てています。義昭の御成時の宴会の主な舞台となった「十二間（広間）」からは、越前特産の笏谷石でしつらえられた花壇に咲きほこる草花を鑑賞しながら酒宴を楽しんだ姿が想像されます。将軍義昭を

招くことのできる格式の高い庭園として造成されたのです。

朝倉館は、同時期の戦国大名の当主館の大きさに比べると、平坦地として使用できるスペースが決して広くはありませんでした。しかし、谷地形という限られたスペースの中で庭園と建築を巧みに配置しています。武家屋敷や町屋が軒を連ねる一乗谷の賑わいの中に、京で流行していた「市中の山居」（市中にいながら自然に近い空間）たる庭園空間が創造されていたのです。



湯殿跡庭園

（撮影：北野武男氏、画像提供：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館）

戦国武将らしい豪壮な立石で構成された湯殿跡庭園。あしかがよしあき足利義昭の御成時には朝倉館に東楼があったとの記録があり、東楼から湯殿跡庭園や一乗谷の城下を俯瞰していたのかもしれませんが。

【住所】福井市城戸内町（JR 福井駅から浄教寺行き京福バス「武家屋敷前」下車3分）

## 関連史料・ゆかりの地

参考資料等

藤田若菜「コラム 庭園が教えてくれる中世のルール」、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編『国指定特別史跡 指定45年記念特別展 一乗谷～戦国城下町の栄華～』

執筆・協力

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 学芸員 石川 美咲